

へき地小規模校支援・地域貢献（草の根教育実習）推進事業 に関する調査報告（2）

相馬 哲也・加藤 裕明・高桑 純・村田 敏彰・村越 含博

抄録：筆者は2022（令和4）年度を初年度として、本学企画事業「へき地小規模校支援・地域貢献（草の根教育実習）推進事業」として調査研究を行うこととし、実際に学生の実習の受け入れを行った市町村へのインタビューや参加した学生の事前・事後の質問紙調査を実施した。2023（令和5）年度においては引き続き、へき地小規模校での実習体験が学生に与える影響等を調査するとともに、「地域づくりに関わる小学校教員」に求められる資質の視点から、実施校の校長等から聞き取り調査を行った。学生の実習先は、北海道教育委員会（以下 道教委）が企画する「草の根教育実習」の制度を活用し、調整を図りながら決定したものである。学生へのアンケートなどから、本事業が学生の「教師を目指す意識」が高まるとともに、「小規模校における教育実践」への理解が深まるなど、成果が見られる。継続的に調査を行うことにより、本学科教職課程における有為な人材育成に資する研究とするものである。

キーワード：草の根教育実習、へき地小規模校、教師の魅力、地域創生、養成校の役割

1. はじめに

本学こども発達学科では、北海道の各地域における教育の実情に関心を持つ、視野の広い教師を養成するため、2022（令和4）年度から5か年計画の企画事業として、「草の根教育実習」の調査研究を継続的に行うこととした。同時に「草の根教育実習」への学生の積極的な参加を促すため、教員の支援体制を拡充・整備した。その上で、可能な限り、実習校を視察し学生の取り組みを励ますとともに、関係市町村教育委員会も訪問し、受け入れに対する謝辞に併せ、教育長等へのインタビューを行うこととした。2022（令和4）年度の調査報告については、北海道文教大学論集第24号で詳述しているが、以下に概要を記す。

市町村教育委員会からの聞き取り調査からは、「草の根教育実習」の制度への高い評価と並んで本学の学生の取組状況に対しても高い評価を得ることができた。一方で期限付き教員の未配置が発生するなど、深刻な教員不足の実態も明らかになった。また、「関係人口」の増加については、必要性を理解するものの、教育委員会として主体的な取り組みには結びついていないといった実情も把握することができた。学生からの聞き取り調査などからは、へき地小規模校への理解が深まり、将来の勤務地としてイメージしやすくなるとともに、ICTをはじめ施設設備の充実が図られており、その活用も進んでいるといったへき地小規模校の実情の理解も深まったことが明らかになった。今後、へき地小規模校における教育への理解から、「地域づくりにかかわる小学校教員」のあるべき姿について、現場の校長等からも聞き取りを進め、学生にとって何がへき地教育に向かわせるインセンティブにつながっていくのか、といった観点も含めて継続調査とすることとした。

なお、2022（令和4）年度の学生の取組については「報告書」として作成し、関係機関・学校等に配布した。

2. 「草の根」実施に向けた参加支援体制と参加状況

調査にあたり、できるだけ多くのデータを収集し、経年変化等も把握する必要があると考えた。したがって、2022年度から2025年度にかけては「調査報告」として各年度の調査状況等を報告し、2026年度を目途に5年間の調査結果を論文としてまとめる予定である。

2.1 円滑な実施に向けた共同研究体制およびスケジュール

こども発達学科で主に小学校教員養成に関わる5名の教員が分担し、以下のとおり研究体制を組んだ。

相馬哲也（以下 相馬）…総括，道教委対応，市町村教育委員会対応，巡回指導

村越含博（以下 村越）…エントリーシートの作成指導及び道教委への提出，アンケート集計分析，巡回指導

加藤裕明（以下 加藤）…巡回指導

高桑 純（以下 高桑）…巡回指導

村田敏彰（以下 村田）…巡回指導

実施スケジュールは、以下のとおり。

2023年6月中旬 道教委から実施についての予告通知

エントリーシートへの記載方法や前年度の受け入れ実績等の紹介

7月上旬 正式通知受け入れ学校一覧の公開

学生に周知し，エントリーシート作成・提出を指示

7月中旬 道教委に希望地等を記載したエントリーシートを提出

7月下旬 道教委からマッチング結果の通知

学生に周知し，受け入れ学校等への連絡方法等の指示

事前・事後アンケートへの協力依頼

8月上旬 学生から，学校との相談結果（実習期間等）の報告，事前指導

9月～12月 「草の根教育実習」参加学生への事前指導（オンデマンド配信）

10月以降 終了した学生へ報告書の作成・提出の指示

2.2 「草の根」参加状況

2023（令和5）年度の実施状況は表1の通りである。実績としては，参加学生数60名，受け入れ学校数は33の自治体の38校となっている。

なお，2022（令和4）年度は，こども発達学科から37名，国際言語学科から1名の計38名の参加希望者があり，受け入れ学校数は，22の自治体の25校であった。

表1 2023年度 草の根教育実習 実施校及び実施日程等

No.	圏域	管内区分	市町村区分	実習校	参加学生の学年	参加回数	実習開始	実習終了	日数
1	道央 13自治体 17校	石狩	自治体E1	M小学校	4	2	10/17	10/19	3
2					3	1	10/16	10/20	5
3					3	1			5
4					2	1	9/25	9/28	4
5			自治体E2	I小学校	4	1	10/30	11/03	5
6					3	1	12/5	12/7	3
7				N小学校	3	1	10/30	11/2	4
8				T小学校	4	2	9/12	9/14	3
9			自治体K	S1小学校	3	2	9/4	9/6	3
10			自治体C	S2小学校	2	2	8/28	9/1	4
11				K小学校	3	1	10/10	10/12	3
12				H小学校	2	1	9/25	9/27	3
13					2	1	11/13	11/15	3
14			2		1				
15		後志	自治体I	IS小学校	3	2	10/2	10/6	5
16			自治体R	R小学校	3	1	9/11	9/15	5
17		胆振	自治体S	T小学校	3	2	10/10	10/14	5
18					2	2			
19		日高	自治体A	H学園(義) ¹⁾	4	2	10/17	10/20	4
20			自治体U	U小学校	1	1	9/19	9/22	4
21			自治体E	E小学校	4	2	9/25	9/28	3
22					1	1			
23			自治体S	S小学校	4	2	11/27	12/1	5
24			自治体B	N小学校	2	1	9/13	9/15	3
25					2	1			
26			自治体H	A小学校	3	2	9/25	9/27	3
27		1			1				
28	道南 6自治体 7校	渡島	自治体K	K小学校	3	1	9/19	9/22	4
29					3	1			
30					3	1			
31					3	1			
32			自治体N	OG学校(義)	3	2	9/25	9/27	3
33			自治体H1	Z小学校	1	1	9/11	9/15	5
34					1	1			
35					1	1			
36					1	1			
37			自治体H2	I小学校	1	1	8/31	9/6	5
38			自治体Y	K小学校	4	2	9/25	9/28	4
39					1	1			
40				YK小学校	3	1	9/19	9/20	2
41		檜山	自治体I	T小学校	3	1	8/21	8/25	5
42	道北 5自治体 5校	上川	自治体B	M小学校	4	2	10/23	10/25	3
43			自治体F	Y小学校	2	1	11/20	11/22	3
44		2			1				
45		宗谷	自治体R1	S小学校	3	1	12/4	12/8	5
46			自治体W	WM小学校	1	1	11/27	12/1	5
47		留萌	自治体H	Y小学校	2	2	10/16	10/18	3
48					2	1			
49	道東 9自治体 9校	オホーツク	自治体M	K小学校	4	2	9/25	9/28	4
50			自治体Y	Y学園(義)	3	1	12/4	12/6	3
51					3	1			
52			自治体K1	O小学校	2	1	9/13	9/15	3
53		十勝	自治体K2	K小学校	1	1	9/19	9/22	4
54					1	1			
55					4	1	10/24	10/27	4
56			自治体O	S小学校	3	2	12/5	12/8	4
57			自治体S	M小学校	3	1	9/19	9/22	4
58		釧路	自治体H	H小学校	4	1	9/4	9/8	5
59			自治体K	Y小学校	4	2	11/6	11/10	5
60		根室	自治体S	S小学校	2	2	1/26	1/26	1
		13	33	38	60				

3. 調査の方法

参加学生に対しては質問紙調査を行った。質問紙調査から読み取れる学生の意識などについて、以下に整理した。

また、筆者（5名）は分担の上、巡回指導を行い、参加学生への助言を行うとともに、受け入れ学校の校長等から、「地域づくりにかかわる小学校教員」のあるべき姿やその育成に向けて養成大学に取り組んでほしいことなどについて、インタビューを行った。

4. 質問紙調査

4.1 学生への事後の質問紙調査から捉えられる「草の根教育実習」と教職志望との関係

表2 へき地教育・複式教育への理解

項目	回答数	割合
十分にできた	19	83 %
割とできた	3	13 %
あまりできなかった	1	4 %
ほとんどできなかった	0	0 %

「草の根教育実習」に参加した学生のうち、今年度が初めての参加となる学生に限定して事後アンケートを実施した。36名の該当者のうち、23名からの回答が得られた。

表3 小規模校の魅力の理解

項目	回答数	割合
十分にできた	19	83 %
割とできた	4	17 %
あまりできなかった	0	0 %
ほとんどできなかった	0	0 %

表2は、「へき地教育・複式教育への理解」についての質問である。「十分にできた」「割とできた」と回答した学生が9割以上を超えている。さらに、表3「小規模校の魅力の理解」についてはすべての学生が「魅力を理解できた」回答している。このことから参加学生は、この実習の効果が十分果たされている上に、初回参加者として、小規模校を肯定的に評価しているといえる。

表4 「草の根教育実習」で、へき地教育への関心は高まりましたか

項目	回答数	割合
とても高まった	14	61 %
ある程度高まった	7	30 %
少し高まった	2	9 %
高まらなかった	0	0 %

また、表4にみられるように、「へき地教育への関心」についても9割以上の学生が「高まった」と回答しており、実習に参加したことを通して、教職を志望する上で、小規模校での勤務も視野に入れる意識につながる可能性が見られた。

では、学生たちはへき地・小規模校のこういった点に関心を寄せたり魅力を感じたりしたのであろうか。

図1は「どのような点について関心が高まりましたか」というアンケートの結果である。図1から肯定的意見の多くは「学級の児童の少なさ」「学校の全体の児童の少なさ」に集まっている。多様な背景を持つ児童への指導の困難さが浮き彫りになっている学校教育（文部科学省2022）において、小規模校・少人数指導については、令和の日本型学校と言われる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理念を実現するにあたって、今後重要視されていくという議論もある（玉井・川前2023）。その中でこの結果は、少人数学級が、教員不足が叫ばれる中において、令和の日本型学校を支える教員となっていく学生にとっては、教職の魅力化につながり、志望者増への期待をもつことができるのではないか。それは、表5「草の根教育実習で教員志望者が増加すると思いますか」という質問に対し、全ての学生が「そう思う」と回答している点からも述べることができる。

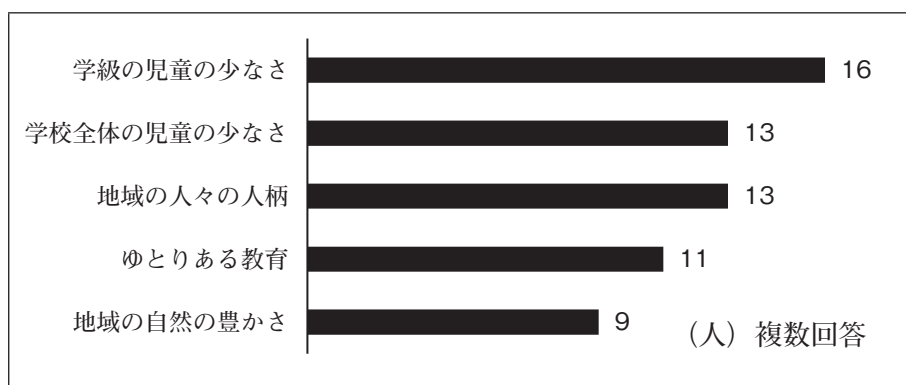


図1 どのような点について関心が高まりましたか

表5 「草の根教育実習」で教員志望者が増加すると思いますか。

項 目	回答数	割 合
とてもそう思う	17	74 %
ある程度そう思う	6	26 %
あまりそう思わない	0	0 %
そう思わない	0	0 %

表6 実習先の教員の様子についてどのように思いましたか。

項 目	忙しいそう		熱意をもって指導している	
	回答数	割 合	回答数	割 合
その通りだと思った	16	70 %	22	96 %
だいたいその通りだと思った	6	26 %	0	0 %
あまり思わなかった	0	0 %	1	4 %
思わなかった	1	4 %	0	0 %

表7 実際にその学校の教員になりたいと思いましたか

項 目	回答数	割 合
とてもそう思う	13	57 %
ある程度そう思う	7	30 %
あまりそう思わない	3	13 %
そう思わない	0	0 %

このことは、単純に教員の「小規模校だから」「へき地校だから」という意味での働き方改革といった「仕事の量」の側面からの評価ではないだろう。それは、

表6の、「教師は忙しい」において、多くの学生がそう思うと回答した上で、同じく表6の「教師は熱意を持って指導している」という回答の多さに浮かび上がる。

この結果からは、学生は教師の忙しさを捉えつつも、その指導性の高さを肯定的に評価している。つまり、少人数・小規模校であっても多忙さを見出している。それでもなお、魅力を抱き、関心を示すのは、

小規模校に勤務する教職員の児童に接する姿を目の当たりにしたからではないかと考えられる。

また表7では、「実際にその学校で勤務したい」と答えた学生が8割を超える。少人数指導によるゆとりのある教育の質や、地域

の人々・自然といった教育環境への肯定的な捉えが、教員採用後の勤務地に、実習校を選びたいという思いにつながったと考えられる。加えて、図2の示す通り、実習校に限らず、「へき地・小規模校」での勤務を自身のキャリアの全てもしくは一部に位置づけて考える学生が全体の3分の2以上を占めており、地方勤務への期待感が読み取れる。

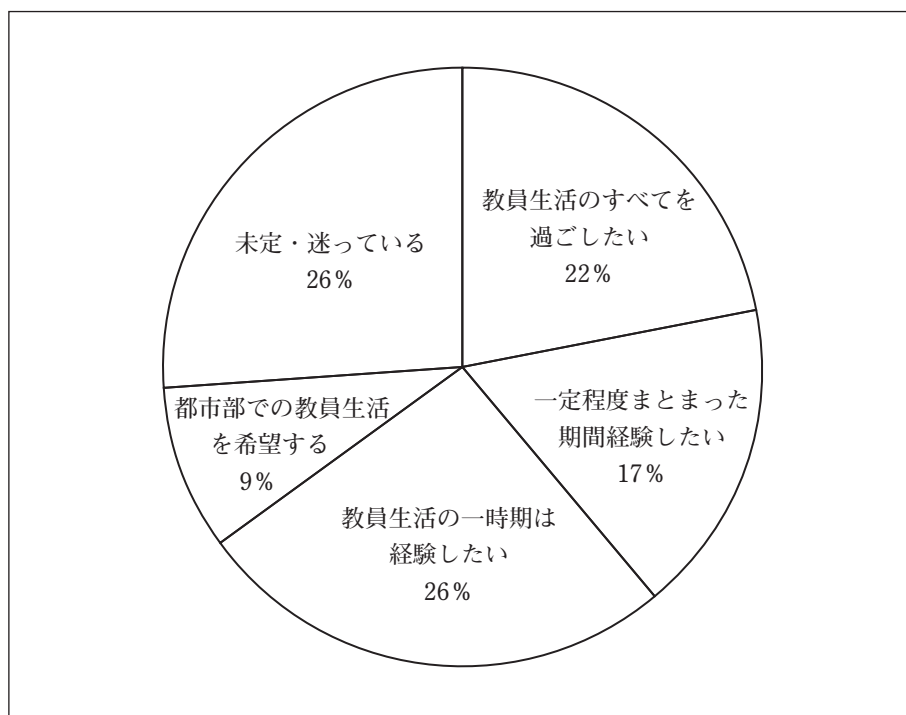


図2 「草の根教育実習」の実施校のような地方の学校で勤務したいか

4.2 考察

以上、本学の学生への「草の根教育実習」事後アンケートについて、その分析を試みた。「草の根教育実習」は、へき地・小規模校への理解・興味に留まらず、教員志望者の増加、キャリアの中でへき地・小規模校を含めた勤務の可能性をも持たせることがうかがえた。

5. 実習先学校の校長等へのインタビュー調査

ここでの記載では、圏域を示すとともに、自治体名と学校名については任意のアルファベットで表示することとする。なお、この調査は、2. 1に記載の5名が手分けして実習校に出向き、半構造化インタビュー²⁾で行った。また、質問項目は加藤のインタビュー内容にある下線部分を基本とした。

5.1 加藤によるインタビュー内容

道央自治体 A, H 学園 (義)

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 10 月 19 日 (木) 13 : 00 ~ 15 : 00 ・ H 学園 校長室・校長

○地域づくりに関わる小学校教員のあるべき姿について

H 学園は来年度から地域学校協働本部の活動も開始する。教育系の企業が生活科や総合学習の指導案作りにおいて、学校を地域につなぐ存在として活動している。子どもたちを地域のフィールドワークに連れ出す機会が多くなった。例えば今週で言えば、月曜日は 5 年生が米学習で脱穀作業に出かけ、火曜日には、町民³⁾が、家庭科のミシンの授業に来てくれた。また水曜日は 4 年生が「炭鉄港」⁴⁾の学習で鉄道資料館に行き、木曜日には 3 年生が郷土資料館に出かける。5 年生は米の脱穀作業のため地域の農家に行く、というように、「これだけ地域と学校のつながりがあるのは初めての経験」であるという。H 学園においては、「小学校で学ぶこと自体が地域で学ぶことであり、学校教育自体がよりよい地域社会をつくりあげる一歩になって欲しい」と語った。そのような学校教育の担い手が、今後の「地域づくりに関わる小学校教員のあるべ

き姿」となるだろう。だが、単純に教師だけに地域と関わることを求めても難しい。H 学園の先生方も、開校当初は子どもたちを地域に連れ出す回数が多くはなかった。一般的に「先生」は、「外部とのやりとりが苦手」で、「教科指導に他者が入ることを嫌がる雰囲気」がある。H 学園の先生も例外ではなかった。だが、この半年で、先生方が徐々に地域に出るようになっていく。従来、教室のなかだけで教科指導を行っていた高等部（中学校）の先生も、「地域に出る初等・中部の先生方の刺激を受けて」地域に出るようになった。その背景には、教育委員会の地域プロジェクトマネージャーや教育連携コーディネータ、さらには社会教育の業務委託を行っている教育系企業のスタッフが教育魅力化コーディネータとして、学校と地域との連携のため、常に「動いている」ことを抜きに語ることは出来ない。彼・彼女らはフリーアドレスの職員室や、町民共有エリアの図書室にしながら、学校と地域とのあいだを行きし、教師が地域に出ていく準備をしてくれている。先生方は業務量を増やすことなく地域と連携し、総合学習の指導案づくりに取り組むことができるようになった。学校と地域をつなぐ役割を担う「ひとが常に動いていること」がその大きなカギである。「先生」だけでは学校と地域をつなぐことは不可能である。

○その上で養成校に望むことについて

これまでの教員養成では、いわゆる「いい子」（優等生）が教員になってきた「伝統」がある。彼ら彼女らは、教員になったとき、「勉強を大事にすること」、「〔狭い意味の〕学力や偏差値を伸ばすこと」に注力する傾向がある。もちろん「学力はあればいいに越したことはない」。ただ、「ペーパーテスト」の結果でははかることのできないこと、「土に触れ、動物に触り、遊ぶこと」、「面白い」と思うことを大切にすること、「人としての魅力や経験」といったものを身につけている先生は、「子どもにとっても魅力的な先生であることはわかりきっている」。そういったことをこれからの先生には期待したい。H 学園に来てくれた「草の根教育実習」の学生さんには、できるだけ楽しい経験をしてもらいたいと思っている。

道東自治体 Y、Y 学園（義）

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 12 月 6 日（水）13：30～14：30・Y 学園 校長室・校長

○地域活性化に関連し、どのような教員を育成しているかについて

Y 学園の先生方は、Y 町内居住ではなく、30 キロ 40 キロ離れた町から通勤している。中には 70 キロの遠方から通勤しているひともある。年齢層は初任が多い。ここで教員として 4 年間で過ごしてもらい、「Y 学園から来ました」と言える教員になってほしい。

○地域と学校との関係でこれからの教員養成について、養成校に望むことについて

「望むこと」というよりも、自分自身が一般教員だったころに、「自分の仕事の魅力を伝えておけばこんなことにはならなかった」と、「自責の念にかられるばかり」。約 6000 人の教え子の中でも、教員になったのは「両手に収まってしまう」。だから今は「教員は楽しいよ」「ちょっと考えてね」とやっている。「学校を地域に開く」というお話があったが、逆に、「こちら〔学校側〕から地域に出て行って、認知度を高めれば少し〔学校の〕応援団も増える」と思う。だから「教え方の技術は必要だが、ひとと関わることができる、コミュニケーションがとれる人間じゃなかったらこの世界ではやっていけない。特に地域ではひとを大切にするので」、「コミュニケーションの力はとっても大切」だと思う。

道東自治体 O、S 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 12 月 7 日（木）11：30～12：30・S 小学校 職員室に隣接した応接室・教頭

○地域活性化と学校との関係について

学校は「地域の核」であると思う。地域の発展には学校はあるべき。ただ少子化の波は避けられない。地域の人口が減って、地域から要望があれば学校を閉じることも考えなければならないかとも思う。が、S 小学校は S 町の中の小規模校 4 校の中の特認校で、大規模校と選択できる学校なので、「閉じる」というこ

とはないだろう。

○地域と学校との関係でこれからの教員養成にかかわって、養成校に望むことについて

教員志望者は減っているので志望してくれるだけでありがたい。「教員へのモチベーションを高めるような指導」をしていただければと思う。「学校の特徴がすなわち地域の特徴」みたいなところがあるので、それに応じた教育をしていく必要がある。S 町のような農村部では、「学校や教員は」地域に有無を言わず入らざるを得ない。「地域の方に助けていただくことも多々ある」ので、地域との間に「カベを作ってしまうと教育は立ちいかなくなる」。「カベ」をつくらないような教員が求められるだろう。

5.2 高桑によるインタビュー内容

道央自治体 E, T 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 13 日（水）11：00～12：00・T 小学校 校長室・教頭

地域との結びつきが強い学校であるため、様々な教育活動において地域住民としっかり連携していけるような人材を求めている。子どもたちの家庭はほとんど地元の住人である。

コミュニティー・スクールとなっており、隣の福祉施設など地域の各種施設の利用や人材の活用など、教育活動の中に地域とのつながりを非常に多く取り入れている。勤務時間内であれば、積極的に地域とかわり、連携ができる教員を求めている。

道東自治体 K, O 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 14 日（木）10：00～11：00・O 小学校 校長室・校長

教育職は、いろいろ大変なことも多いので、知識や技術よりも、前向きに元気に取り組める人材を育ててほしい。地域と連携した取り組みが多いため、地域の人々から信頼される教員であってほしい。

学校として直接的に関係人口の増加につながる取組は思い当たらない。学校が地域づくりに貢献できるとすれば、子どもたちをしっかりと育て、地域に残って、あるいは地域に戻って地域づくりに貢献できる、郷土愛に溢れた人材を育成することが大切と考える。

道南自治体 U, U 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 21 日（木）14：00～15：00・U 小学校 校長室・教頭

人を育てるという意識を持った教員を育てていただきたい。また、新しいものにどんどんチャレンジする意識を持って欲しい。教師が大変な仕事だと言う覚悟も必要で、困ったときにはいろいろな人に相談したり、先輩たちのアドバイスを素直に聞き入れる態度も大切だと考えている。地域の人とのつながりを大切にし、連携できる教員であってほしい。

学校として地域の振興に貢献できる事は、子どもたちの地域理解を深めて、地域に対する愛着を高めることによって、その地域に残ったり戻ってきたりする子どもを育てることである。

道東自治体 S, M 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 22 日（金）10：00～11：00・M 小学校 校長室・教頭

教員養成系の大学に対しては、教師としてのやりがいや子どもたちと接することに対して喜びを感じる教師を育てていただきたい。郡部の学校としては、地域としっかり連携を取り、コミュニケーションを取れる教員が望ましいと考えている。

道東自治体 K, K 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 23 日（金）14：00～15：00・K 小学校 会議室・教頭

地域との連携事業がたくさんあるので、教員には地域の人と良い関係を作れることを期待している。

学校として人口減に対して直接できることは、現実的には特段ない。帯広から通勤している教員がある程度いて、学校として強く居住を望むことはできないし、地元の人もそういった事情は充分理解してくれている。

道南自治体 S, T 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 10 月 12 日（木）11：00～12：00・T 小学校 校長室・校長

教員としての基本的な人間性が豊かで、意欲が高い教員を育成していただければありがたい。地域との連携が非常に密なので、地域とつながることに積極的に関わる教員が望ましい。

学校がその地域の関係人口の増加に対して貢献できることは、特に思いつかない。直接的に人口増に貢献する方策は、学校が考えることではないのではないか。学校ができることは、あえて言えば、ふるさと教育などにより、ふるさとに対する子どもたちの愛着心や郷土愛を高め、その結果として将来的に子どもたちが地域に戻り、地域起こしに貢献するというところで叶えられるものではないか。

道央自治体 E1, M 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 10 月 18 日（水）10：30～11：30・M 小学校 校長室・校長

どの学校においてもいえることだが、教員には粘り強さや保護者と良好な関係を作ることができる人間性が最も大切だと考えている。

この実習を行っても学生が住み着いてくれるわけではないので、学校として地域の関係人口の増加に貢献できることは思い当たらない。学校としては、受け入れた子どもたちをしっかりと教育していくことに全力をつぎ込むことに尽きる。

道北自治体 F, Y 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 11 月 21 日（火）14：00～15：00・Y 小学校 校長室・校長

大切なのは、やはりその教師の人間性であり、同僚や地域の人に親しみを持たれる、あるいは信頼される人材であることが何より大切である。特別支援のノウハウを持っている事は大事だと考えている。

学校が地域の人口を増やすことは難しいが、その地域の人々の学校に対する思いを汲んであげることが求められる。特にへき地の学校には歴史の古い学校もあり、住民の思い入れが非常に強い。

道南自治体 S, S 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 11 月 28 日（火）14：00～15：00・S 小学校 校長室・教頭

教員養成系大学への要望としては、管内にすぐ退職した教員がいたので、少なくとも将来を見据えて、教員人生を設計してくれるような学生を育ててほしい。教師に求めることについては、地域との連携、特に地域を理解することに対して前向きである教師であってほしい。

地域の振興に関わって学校や教員ができることは、子どもたちの地域に対する理解を深め、郷土愛を高めて送り出してやることに尽きるのではないか。その結果、将来地域に住み着く子どもや、いろんな場所で活躍する子どもたちを育てていきたい。子どもたちがそのまま地域に残ることを目指すことではない。コミスクでもそういうスタンスで地域の子どもたちを育てていこうと考えているとのことである。

5.3 村田によるインタビュー内容

道央自治体 E1, M 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 27 日（水）13：00～14：00・M 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、実習生は大変意欲的に取り組んでいることから、是非現場に戻って教員として活躍してほしいと思っている。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、学生による現場経験の希望をできる限り聞き出し、それらをかなえられるような職場内の条件整備に努めたい。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、授業や課外活動等、あらゆる場面で現場のことをより深く感じる機会を多く設定してほしい。

道央自治体 K, S 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 6 日（水）9：00～10：00・S 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、少しでも現場の様子を知ってもらって教職の良さを見取ってくれたらありがたい。特に教員の努力や子どもの良さについて、もし教職に就かなくても教育の良さを知ってもらえるとよい。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、免許制度の解消により現場復帰した人の際の採用がしやすくなった。これが雇用促進につながるとよい。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、学生にもいろいろな意欲があり、向き不向きもあると思うが、教員は AI に代わるものではないので、しっかりと養成してほしい。

道央自治体 C, S 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 8 月 30 日（水）9：00～10：00・S 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、今回の本校における実習のように、運動会に向けた準備や活動といった、授業のみならず様々な活動を体験することのできる非常に貴重な機会である。是非多くの学生に体験してほしい。ただし、本校のような通勤や宿泊の確保が難しい学校の場合は地域の協力が必要となってくる。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、本校は担任外がおらず、すべての活動を総出で取り組んでいる。非常に狭い地域で市街地からも離れていることからなかなか人手が集まらない。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、本校のようなへき地複式校でしか味わえない経験もあるので、今回のような事業にも積極的に取り組んでほしい。

道央自治体 C, K 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 10 月 10 日（火）11：30～12：00・K 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、本校に来る学生はどの子も大変まじめで、多くのことを吸収しているので、是非このような機会を今後も続けてほしい。

道央自治体 C, H 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 27 日（水）8：30～9：30・H 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、実習生は休み時間に盛んに子どもとかかわるなど、一生懸命取り組んでいる。一方で複式学級であることから、子どものところに入っていく難しさも痛感している。その加減をこの実習を通じて学んでほしい。また、この事業によって教職を目指す学生が増えるとうい。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、本校に限らず、全体的に担任外教員が欲しい現状がある。職員の休暇等で補欠が必要な場合もままならない。行政では加配をつけると言っているが、肝心の人材が足りない。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、希望者を増やしてほしい。学校で働きたいという思いを持てるような指導をしてほしい。

道央自治体 R, R 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 14 日（木）9：00～10：00・R 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、教職を迷っている学生には、この事業で教職の魅力を感じてもらえと思う。生身の子供を相手にする魅力に加え、20代の先輩教員が自分の頑張りを見せるいい機会にもなる。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、本校は何年かかけて職場環境を整えてきた。今では働きやすい雰囲気になっていると考えるが、そうでない学校もあると思われるので、ライフワークバランスを考慮した労働環境整備が求められる。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、自分が学生の頃は大学というのはアカデミックな面が強く、人間性を高める部分が少なかった。また、今では若い子は LINE やメールなど、文字でのやり取りが増えており、初めて会う人とのやり取りに慣れていない。また、失敗経験の場が少なく、失敗したことを思い詰める傾向もあると思う。そのような事柄への対応力をつけてほしい。

道南自治体 H, Z 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 15 日（金）8：00～9：00・Z 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、これからの先生を目指す学生が少しでも増えるとよい。教員と子どもとの距離は小規模校の方が近いので、良い面・よくない面の両方の教員の生の姿を見ることができる。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、「ブラック」と思われまいようにベテランの意識改革が必要である。たとえ職場内でベテランのペースで仕事をしていたら、若手が学校としてのシステムをリセットして、その範囲内でできるようにやり方を変える、といった雰囲気作りが重要である。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、今回の実習生は先生方に盛んにアドバイスを求めたり、あいさつやお礼もしっかりとできる人ばかりであった。現場としては即戦力となる人材が欲しい。そのためには現場実習の経験が必要である。そのためにもインターンシップの一層の充実が求められる。

道南自治体 I, T 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 14 日（木）15：00～16：00・T 小学校 校長室・教頭

草の根教育実習への期待としては、教員不足の将来の担い手を、この活動を通じて一人でも教員を志すきっかけになれば、と考える。学生としても小規模校ならではの距離の近さも体験できたのではないかと思っている。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、地域に退職教員がおり、支援員として携わってくれている。教員としての人数は 50 代が多く、中堅の人数が少ないのが課題である。

教員志望者に向けた養成系大学への期待については、草の根教育実習を希望する学生が複式指導等の実践の場が増えるのは良いことだが、受け入れる側のキャパもあるので、その調整が課題である。学生が就職後すぐにこのような地域に来なくてもよいと思うが、この経験を将来に生かしてほしい。

道北自治体 B, M 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 10 月 23 日（月）9：30～10：30・M 小学校 校長室・校長

草の根教育実習への期待としては、3 日間という短期間であっても大変良い経験となる。教員になる気持ちが高まるものと思われる。やりがいを感じる良い機会である。

教員不足の実情と解消に向けた展望としては、本校は期限付き教員が足りない実情がある。町には外国語の選科教員が 1 名配置されているが、町の中心部から離れていることから時数や通勤の関係で本校には来ていない。退職教員活用事業として要望を出しているが、見つかってない。

教員志望者増に向けた養成系大学への期待としては、本町の近隣にある養成系大学の教員と話す機会が多いが、まずは教員採用試験を受ける学生が少ないという現状を聞いている。1・2 年生までは意識が高いものの、3 年生時の 5 週間の教育実習で意欲が低下する学生が目立つことから、現場としても協力できることは協力したいと考えている。試験を受けて教員になろうという気持ちを持ってほしい。

5.4 村越によるインタビュー内容

道南自治体 B, N 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 14 日（木）10：30～11：30・N 小学校 校長室・校長

本校は、アイヌ民族居住地として世界的にも注目される地域である。その中にある学校ということの意味を学校長は「N 小がなくなれば、この地域のアイヌ文化がなくなるのではないか」と考えており、その点において本校の存在意義は世界の民族文化継承としても重要である。これまでも体験学習としてのアイヌ文化学習は整備されているが、アイヌの歴史、共生といった観点からの「アイヌ学」というような学習活動を模索している。

校長は「俺らが学校の俺らの先生というような、顔を知ってもらえるような関係性が重要だろう」と、教師と地域の心理的な距離感を重要視する。そのためには、地域の人が「学校を知る」段階から一歩踏み込み、地域と一緒に行事をやり、地域の人が「教師を知る」関係が重要と考えている。

地域との関係を深めるための周辺整備として、例えば休みのシフト制（土日の行事出席の時の休みなど）を取り入れるといった勤務条件の柔軟な対応も必要と考えている。その上で、「学校がやってくれるから、とか地域がやってくれるから」というような利害関係から抜け、例えば「これは学校ではできません」という断ることもできるような関係構築が必要」と言った趣旨の見解を述べていた。

道南自治体 H2, I 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 1 日（金）11：00～12：00・I 小学校 校長室・校長

本校は、校舎の背後は山、目の前は海という立地にあり、特任校のため他地域から通う児童が多い。「子供は宝」という思いが地域にあり、積極的に児童を受け入れている。町内会長は毎日のように学校を訪れ、地域で行事を実現させるといことが日常化されている。地域が学校を支えているような関係が築かれている。

校長は「教師は地域行事への参加が必要」と考えており、「地域の人たちがうちの町の先生として認めてくれていることによって、地域と学校が一体化した教育活動が可能になっている」と語る。地域の人たちは子どもが大好きで校外学習にも協力的であり、地域の人々が楽しいと子どもも楽しんでくれるような、地域が学校と一体化している現状を肯定的に捉えている。

道南自治体 Y, K 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 26 日（火）10：30～11：30・K 小学校 校長室・校長

本校では、地域学習の充実を図っている。地域の豆腐屋さんに校外学習に児童が行った際、飲ませてくれた豆乳に思わず、「うわーまずい」と感想を漏らしてしまった。しかしその豆腐屋は、それを予見していたらしく、カルピスを用意してしてくれた。このエピソードの意味するものは何か。それは、体験学習をした際の子供の反応を「予見」しているという、地域の豆腐屋の教材化の視点である。つまり、地域学習がその地域の中で教育方法を構築するようなレベルまで浸透している証左といえよう。

道南自治体 N, OG 学校（義）

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 26 日（火）14：30～15：30・O 学校 校長室・校長

本校では、義務教育学校の特性を活かし、1 年生～9 年生までの総合・生活科を実践している。観光地であることから英語学習にも力をいれ、9 年生は英語で観光遊覧船のプレゼンを修学旅行先で実施。8 年生は近隣都市への宿泊研修で同様に実施している。花卉農家が多く、それらをはじめとする野菜、工芸品などを使った PTA バザーを実施し売り上げているなど、地域との関わりを目指している。また、学校教育目標を生徒会主体で決めるという、社会参画を目指した特別活動も行なっている。

働き方改革の面においても、地域の力を活かすことを想定している。地域の人たちが、先生たちのためになることは、子どものためになっているという構図を大事にしている。「地域立」という言葉がそれを表している。

5.5 相馬によるインタビュー内容

道東自治体 H, H 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 7 日（木）10：30～11：30・H 小学校 校長室・教頭

若い教員集団である。ほとんど全員が教員住宅に住んでおり、地域行事にも積極的に参加している。地域住民との交流は、若い教師の引き出しを増やしてくれるため、生徒指導や授業に生きてくる。本校はこうした環境が整っている。特に意識しなくても、結果として、地域にも貢献できる教員となっている。

教員養成大学では「複式授業」について学ぶ機会があればよいと思う。都市部で育ち、へき地校実習を経験していない新採用の教員は戸惑うことが多い。

道南自治体 K, K 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 21 日（木）9：30～10：30・K 小学校 校長室・校長

ほとんどの教員が近隣の都市部から通勤している。道路も整備され、乗用車で 1 時間はかからなくなっ
てから、この町に住む教員はいなくなった。そのため、地域行事に積極的に参加するのが難しくなっている。
そんな中、子どもたちに「まちを発展させる方法」を授業で研究させることで、指導する教員も自ずとこ
の町のことに詳しくなる。授業づくりで教員の地域理解を進めることができる。

養成大学には学生に「困難を克服する力」を身に付けるよう努めてほしい。困った時に、管理職を含め
他人に相談する力が不足している若者も多い。相談することも危機管理の一つであり、困難を克服する力
である。

道南自治体 Y, YK 小学校

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 20 日（水）11：00～12：00・YK 小学校 校長室・校長

本校は年齢層も高く、近隣の町から通勤している教員が多い。ここに住んでいなくても「地域目線」をもち、相手を理解する力が欲しいと感じる。教員として若い時代に地域づくりに関わるよい経験があると、中堅以上になってからも地域に関わることを厭わない。

若い教員には、教科の専門性が不足していると感じる。小学校教員とはいえ、研究会に所属し、自分の専門教科（領域）に磨きをかけてほしい。こういった考えを養成大学在学中から持っている、勤務してからの取組に期待できる。

このほか、児童集団の動かし方、対人スキル、空間をコーディネートする力などを身に付けてほしい。

いずれにせよ、「働き方改革」の推進の中で、どのように時間を生み出すが課題である。

道東の自治体の教育長

インタビューの日時・場所・相手：2023 年 9 月 7 日（木）13：00～14：00・町役場 教育長室・教育長

わが町の役場職員の定着率がよくない。地元の高校から毎年、複数の生徒を役場職員として採用しているが、中途退職者が多い。18 歳まで生まれ育った町で暮らし、これからさらに 40 数年暮らし続けることや、限定的な環境に疑問を持つという話も聞く。一度、都市部で暮らしたり、都市部の大学で学んでから故郷に貢献する意味で、役場職員として戻ってきてくれるとありがたい。大学では地域づくりに関わる人材として、学校教員、医療職員、役場職員等を U ターン人材を含めて育成してほしい。

6. 考察

6.1 「地域の学校像」として

取材した多くの学校では、学校が所在する地域の成り立ちの中に、学校の教育活動や教育課程が配置されている。これは「地域の特性を活かした」という見方をこえて、「地域の中に学校が存在している」という立場から生まれた教育内容や地域との関わりと言えるであろう。

道南自治体 H, N 小学校におけるアイヌ民族の学習は、世界的にも注目される先住民族文化を継承する地域の役割を、教育課程でも担っていると言っても過言ではないだろう。地域名を冠に付けた「地域学」も地域の要請に応えるような教育課程になっている。すなわち、地域の要請に学校や教育課程がどう応えるかという点において、「社会に開かれた教育課程」を地域側からアプローチしている構図となっている。道南自治体 H2, I 小学校のように町内会の役員が学校に働きかける点もこのことと関連があると言えるよう。

6.2 「地域の教師像」として

道東自治体 K, Y 小学校では、地域の中で仕事する教師に必要なのは、地域の人、隣の人と会話ができることと考えている。「先生だから」と上に構えるのではなく、地域の人たちと一緒に生活をしていくという自覚が芽生えたと、地域志向性も高まる。そのための方策の一つとして、教員の住環境も地域で働く一つの要因であり、快適な住宅を整備する必要もあろう。

以上のインタビューからは、地方や小規模校で働くための勤務条件の整備からの側面が重視される必要があるということがわかってくる。

こうした配慮を踏まえたとして、教師の地域指向性の萌芽はどのように起きるのであろうか。

道南自治体 H, I 小学校校長は、地域の行事などにどこまで参加するかということと、働き方改革の業務軽減の中で葛藤があると、他の校長と同じような悩みを抱える。放課後の地域行事などに対して、地域が職員に求めることはなく、そこは地域住民側の働き方改革の理解があるという。それでも年配の教師は、過去に地域との関係を構築していった経験があるために、地域行事等への参加の理解があるという。一方、若手・中堅世代は経験のなさから、参加意識は高くはない。そういったことから校長は、「若いうちに本校のような地域を経験することは「(教師としての) 最初の経験が教科書になる」という考えから、学生の「草の根教育実習」におけるへき地小規模校での体験が重要と捉えている。

6.3 まとめ

各地域における学校の存在理由は少子高齢化や人口減少の中で、その地域の文化創出の場、コミュニティ形成の場として非常に重要視されていることが窺えた。各学校の校長もその期待を肌身に感じ、教育課程編成に組み込むなど、教職員集団をまとめながら積極的な取り組みを行なっている。しかし、働き方改革による教員の仕事の省力化の中で、どのようにして地域に教職員が関わることができのかを模索していることも見えてきた。その中で「草の根教育実習」におけるへき地・小規模校での実習経験が教職の、「原体験」として位置づけることは、その後の地域で生きる教師像としてのキャリアイメージにつながるのではないかという展望も見られた。

今後は、「草の根教育実習」を経験して教職に就いた者や、受け入れ校の教職員からの意識調査やインタビューによって、上記の展望がどの程度現実になるものなのかを検討する必要がある。

また、2022 年度と 2023 年度の 2 か年において参加した学生の変容などについて、質問紙調査などから経年比較も可能なデータがそろいつつあるため、次年度以降、考察を深めることとする。

注

- 1) (義) は義務教育学校の略である。
- 2) あらかじめ計画していたインタビュー項目に沿って質問し回答を得ていく過程で、対話の流れによっては、その場で加える質問が生じることもままある。「半構造化インタビュー」とは、そのような新たな質問項目も柔軟に含めたインタビューおよびその方法をさす。
- 3) この授業は、H 校長によれば、学園の地域開放スペース「キッチン」で一般向けの裁縫教室を開いていた町民が、学園の様子を見て、特別講師を申し出たことから実現したという。
- 4) 北海道空知の「炭鉱」、室蘭の「鉄鋼」、小樽の「港湾」をつなぐ鉄道を「炭鉄港」と呼ぶ。H 町には、石炭を道外に輸出するための鉄道が通り、北海道の近代を支えた。

文献

玉井康之・川前あゆみ、2023、「令和の日本型学校教育」の社会背景と教育観の転換—少子化・小規模校化時代の個別最適で協働的な学びの展望—『教育学の研究と実践』18: 2-11.

文部科学省、2022、『生徒指導提要』

Report on the Investigation about Support for Small Schools in Remote Areas and Regional Contribution (Kusanone Education Training Program) Promotion Project (2)

SOMA Tetsuya, KATO Hiroaki, TAKAKUWA Makoto, MURATA Toshiaki
and MURAKOSHI Fukuhiro

Abstract: We have decided to conduct research as part of our university's planned project, “Supporting Small Schools in Isolated Areas and Promoting Community Contribution (Kusanone Education Training)”, with 2022 as the first year that students were actually accepted for practical training. Interviews were conducted with the municipalities where the program was held, and pre- and post-questionnaire surveys were conducted with the participating students. In 2023, we continued to investigate the impact of practical training experiences at small-scale schools in remote areas on students, and also conducted interviews with principals of implementing schools from the perspective of the qualities required of “elementary school teachers involved in community development.” We conducted interviews with a range of people that included the principals of the schools. The students' internship locations were determined through coordination and utilization of the “Kusanone Education Training” (hereinafter referred to as “Kusanone”) system planned by the Hokkaido Board of Education (hereinafter referred to as Dokyoi). Surveys of students show that this project has had positive results, such as increasing students' “awareness of wanting to become teachers” and deepening their understanding of “educational practices in small schools.” By continuing to conduct research, we aim to contribute to the development of talented human resources in our department's teacher training program.

Keywords: kusanone educational training, small schools in rural area, attractiveness of teachers, regional revitalization, role of teacher training colleges